

# たまのよこやま

ついに  
**100**  
号達成

平成  
**27**  
年度企画展示

はじまる!!





## 多摩の横山考 - 「たまのよこやま」100号に寄せて -

広報誌「たまのよこやま」が100号を迎えました。創刊号は、今から30年前の1984（昭和59）年5月30日に発行されました。当財団が設立されて5年目のことです。当時、調査課長だった石井則孝さんが、誌名のいわれを紹介されています。それによれば、万葉の時代、防人歌として詠まれた「赤駒を山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」に因んで、「眉引き山」とも称された多摩丘陵の横長のシルエットの特徴に由来するものでした。

言うまでもありませんが、この歌は、万葉集巻第二十、天平勝宝七年（755）に、武蔵国豊島郡の椋椅部荒虫の妻宇遲部黒女の作です。九州は大宰府に防人として赴く主人の行く末を案じて、せめて馬に乗せて行かせたかったと、遠く多摩の風景を眺めて詠まれた情感溢れる歌です。

実は、この歌の中には多摩丘陵の古代環境を語る上で、とても重要な内容が含まれていました。それは、とりもなおさず、赤駒と山野に放しの部分です。

奈良時代、各地に「牧」とよばれる馬や牛の牧場がおかれていました。とくに、馬牧は各国での生産頭数が定められ、平安時代になると政府直轄の御牧が関東地方を中心に設置され、馬の増産体制に入ります。ここ多摩地域でも、小野牧、由比牧、小川牧などが置かれ、小野牧は現在の多摩市内、小野神社が鎮座する一の宮周辺に比定する説が有力です。近隣で調査された落川・一の宮遺跡からは、古代馬を埋葬した跡や馬具（轡・鍔金具）・「土」の焼印などの重要な遺物が見つっています。

椋椅部荒虫は豊島郡の班田農民であり、馬を所有していたことが判ります。これは農耕馬であり秋～冬期は近くの野山で放牧し、春先に駆り込む方式をとっていたことも窺えます。これは季節的放牧とあって、牧内の馬も、おそらく春の繁殖期までは多摩丘陵の各所で分散的な放牧を行っていたのではないかと推察できます。都に馬を貢ぐ際には、馬たちは馴致（鞍を付けて乗馬の訓練をする）のために、広い多摩川の低地に集められたことでしょう。

さて、防人に赴く荒虫は、いったいどういうルートを通り、西国へと向かったのでしょうか？ここで、

彼が歩いたと思われる道筋を辿ってみましょう。

朝、豊島郡の村を出た荒虫は、武蔵国府へと通じる道を歩き、厩前には国府（府中駅周辺）までやってきました。ここから、東山道武蔵路に入り南下します。その前に腹ごしらえ、多摩川の土手に腰掛け、妻が持たせてくれた粟・稗の握り飯を食べたことしましょう。それから、多摩川の浅瀬を渡り、ふと、後ろを振り返った時、きっと生まれ故郷の武蔵野を離れる一抹の寂しさを感じたに違いありません。下の写真は、武蔵路の多摩川渡河点に程近い場所から多摩の横山を望んだところです。



多摩川から見た多摩丘陵の眺望

ほどなく、打越山と呼ばれる小高い丘陵に差し掛かると、両側を大きく抉って開削した幅約12mの道路が続いていました。相模国へと通じる往還路です。この路は多摩市教育委員会による調査で、長さ90mにわたり検出されました。途中、荒虫は小さなお堂の中に建つささやかな七重塔の前で、長い旅の安全と無事に帰郷できるよう、お祈りをしました。やがて、小野路を越え、相模国夷参駅に到着し、ここからいよいよ東海道に入ります。ここから、難波津までは約120里で徒歩約1ヵ月、舟に乗り換え大宰府までは1週間ほどの舟旅です。荒虫のように、東国から防人に赴いた兵士は数多くいましたが、無事生還できたのは皆無に等しかったといわれます。

50年前、私たちの先輩である多摩ニュータウン遺跡調査会の調査員たちが、多摩丘陵に調査の鍬を入れた時には、単に点でしかなかった遺跡どうしが、やがて線として結ばれ、将来、多摩の歴史像を描く語り部となるためにも、私たちは、今後も「たまのよこやま」を発行してまいります。（松崎元樹）

『先祖と生きる - 暮らしとお墓のうつりかわり -』へのご招待

平成 27 年度の企画展示は『先祖と生きる - 暮らしとお墓のうつりかわり -』です。本館の企画展示において、本格的にお墓を取り上げるのは初めてのことです。お墓というと、「死」や「亡くなった人たち」という暗いイメージが浮かびますが、今回の展示ではこの課題を「生きること」や「残された人たち」との関連で考えてみたいと思います。

展示の対象としては、主に集落や屋敷などの生活空間の中にお墓が含まれている遺跡を選びました。いずれも多摩ニュータウン地区内で発掘調査された遺跡ばかりで、他に同じ多摩地区ということで、あきる野市の瀬戸岡古墳群 30 号墳の石室の実物模型も展示しました。見学の順路は「江戸時代」→「室町時代」→「奈良・平安時代」→「古墳時代」→「弥生時代」→「縄文時代」となっています。

考古学関連の展示は一般的に、縄文時代など古い時代から始まって、次第に江戸時代などの新しい時代へと下っていくことが多いのですが、今回の企画展示では、あえてこの順序を逆にしました。「死」を「生」と排他的に峻別するのではなく、両者を相互に規定し合うもの、と捉えてみたらどうだろう、と考えたからです。この点を実感することはとても難しいのですが、例えば、「死」を、自分の身近な人や動物の死として想像してみる、という仮定はどうでしょうか。出発点はあくまで現代、そしてそこで生きている私たち一人ひとりなのです。

発掘された集落や屋敷などの跡を見ると、住居のすぐ後ろにお墓があったり、お墓を取り囲むように住居が作られている例があり、多摩ニュータウン地区内でもこのような例が認められます。お墓、すなわち「亡くなった人たち」が暮らしの中に、つまり「残された人たち」の中にちゃんと位置づけられて生き続けている、あるいは逆に、「残された人たち」が「亡くなった人たち」に見守られて暮らしている、ということになります。このような昔の人たちの考え方も、先に提案した仮の想像をすることで、現代の私たちにも理解が可能となるかも知れません。お墓が自宅のすぐ後ろにある、という人は、現代ではきわめて少数でしょうから。たいていは故郷や近隣のお寺の中、あるいは、仮に町内にある場合でも、共同の墓地内ということになるのでしょう。

ここで少し展示の内容にふれておきます。江戸時代、室町時代、弥生時代、縄文時代のコーナーでは、それ



環状の墓墳群（縄文時代）

ぞれ、集落から出土した生活用具やお墓からの副葬品などの遺物を展示するとともに、竪穴住居や屋敷、お墓や井戸などの遺構を復元したジオラマを作成しました。それぞれの時代における「暮らしとお墓」の実際を、文字通り、視覚的に見ていただければと思います。なお、室町時代、奈良・平安時代、縄文時代については、板碑や土器などやや大きな遺物も展示してあります。

今回の企画展示の目玉となるのが、展示室の中央にデンと置かれた瀬戸岡古墳群 30 号墳石室の実物大の復元模型です。長さ約 5.5 m、幅 2 m の大きさで、改めて見る者を圧倒する堂々たる展示物となっています。古墳の石室を見たことのない方はもちろんのこと、見たことがあるという方も、是非一度、多摩地方に特有な「胴張り形石室」をご覧ください。

年少者を念頭においた構成も、今回の展示の特徴の一つです。実際、小学生の来館は多く、特に 4 月から 6 月にかけては連日 200 人近い団体見学があります。展示学習の副産物として、地縁・血縁関係が希薄な現代社会を生きる私たち、特にこれからの時代を生きていかねばならない小学生たちにとって、改めて自分たちが独りではなく、両親をはじめとして多くの人たちに見守られて生きている、ということを実感してもらえたら、と思っています。

今回の企画展示では「亡くなった人」と「残された人」の関係について、「ともに生きる」という視点を提示しました。しかし、この見方はあくまで一つの見方に過ぎません。実際に展示を見ていただき、皆様のご感想をお聞かせください。古来、死者と生者が隔絶することなく相互に影響し合ってきたように、展示に関しても、「私、見せる人」→「私、見る人」という固定した一方的な関係を超えて対話ができることを願っています。（福田敏一）



多くの高層ビルが立ち並び、昼夜を問わず多くの人々が行き交う都内有数の繁華街・六本木。現代日本を象徴するとも言えるこの街の足元に、今も江戸の町並みが眠っていることをご存じでしょうか。その中から今回は、四代将軍・徳川家綱の時代から約190年間にわたって六本木に暮らした大身旗本の屋敷跡で見つかった庭園池をご紹介します。

旗本花房家は戦国大名の宇喜多家に仕えた花房正成の直系子孫で、関ヶ原の戦い後に徳川家康に仕え、備中国に五千石を知行する旗本となりました。延宝七年（1679）、六本木に4,500坪の広さを持つ屋敷地を獲得し、その後幕末に至るまでこの地で暮らしました。その当時の屋敷を描いた絵図などは現在のところ確認されていませんが、屋敷がそのまま残っていた可能性が高い明治初期に作られた地図には、御殿や長屋に似た建物や、庭園池と思われるアメーバ状の形が描かれており、屋敷の様子をわずかに伝えています（図1）。

平成25・26年度に屋敷の南側を発掘したところ、この地図に近い形の庭園池が東西約60m、南北約25mの大きさに広がっていることが確認されました（図2・青線が池の範囲）。出土遺物や他の遺構との重なり合いから、この池は18世紀中頃から19世紀中頃にかけて使われていたようです。

明治以降の造成により削られたため、残念ながら

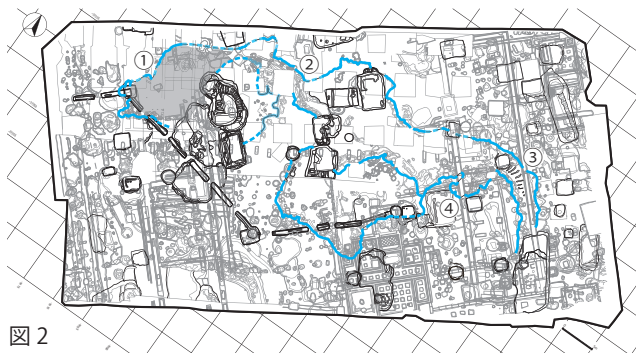


図2

往時の面影はほとんど残ってはいませんが、図2にあるように、砂を突き固めて池底面を堅牢にしたり、玉石を敷くなど造作の様子が見られました。これらの造作は部分部分で異なっており、様々な表情を見せていたと想像されます。

庭園池を作るためには大変な労力と時間が必要ですが、池作りが始まった頃の当主・花房正域（1728～1801）は、定火消や大番頭といった幕府の重要な役目を務め、大変忙しく働いていました。役目によっては役宅に居を移して六本木屋敷から離れていた時期もあるようです。そのような日々の中で、池作りに精を出す時間や、それを眺める余裕があったのでしょうか。それでも池を作りたい、あるいは作らねばならないという、現代に生きる我々が気づかない大きな理由があったのかもしれませんが。私達はその謎が少しでも解明されることを願いながら、今日も調査成果をまとめる作業に勤しんでいます。

（合田恵美子）

※参謀本部陸軍測量局 1883『五千分ノ一東京図測量原図』に加筆



図1 明治初期の調査地（※）

青線内が花房家屋敷地範囲、赤点線部分が庭園池と考えられます。



① 砂を貼っているところ（灰色の部分）

左：遺跡全体図（青線部分が庭園池）

調査区の中央に、大きく広がっている様子が確認されました。最も深い部分で80cmほどですが、当時はもう少し深かったものと考えられます。



② 瓦を転用した桶状の溝



③ 玉石を敷いたところ



④ 連続する筋状の掘り込み



# いま あの遺跡は現在！？ Vol.4

## — 東京ミッドタウン はぎはんもうりけやしきあといせき 萩藩毛利家屋敷跡遺跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査前と現在の写真を比べながら、調査後に遺跡の周辺がどのように変わったのかをご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

高層ビルが建並ぶ港区赤坂。六本木駅の近くに、2007年、一際大きな建物群が完成しました。ホテルや美術館、ショッピングセンター等を含み、今では観光地ともなっている巨大複合施設「東京ミッドタウン」です。かつてこの場所には「防衛庁檜町駐屯地」ぼうえいちようひのきまちちゆうとんちがありました。2000年に防衛庁が市ヶ谷に移転した後、その広大な跡地は再開発が行われることとなり、発掘調査が行われました。

調査では旧石器時代から縄文時代、古墳時代、江戸時代の遺構・遺物が見つかりました。特に江戸時

代、この地は萩藩毛利家の麻布下屋敷あざぶしもやしきがあり、それに伴う遺構・遺物が多数発見されました。陶磁器類を主体とする遺物の総数は75万点を数えます。

特に注目されるのは、屋敷跡のほぼ中央部で見つかった地鎮遺構ぢちんいこうと、その関連遺物です。密教の法具として用いられる「輪宝りんぼう」や、金・銀製の「永楽通宝えいらくつうほう」銭が発見されました。

遙か昔、特別な道具で鎮められた土地の上に、都内屈指の高層ビルが建っていることに、時代を超えた不思議な縁を感じてしまいます。（武内 啓）



写真1：江戸時代の麻布屋敷が描かれた「麻布御屋敷差図」（山口県文書館所蔵）（左）、1992年（中）と2009年（右）の空撮写真。萩藩の麻布下屋敷は、幕末の第一次長州征伐時に幕府に引き渡され更地となった。明治維新後、この地は陸軍用地となり、歩兵第1連隊、近衛師団が配置された。戦後米軍から返還され防衛庁の施設として利用されていた。



写真2：毛利家屋敷跡から見つかった地鎮遺構（左）、出土した輪宝と金・銀製の永楽通宝銭（右）。この他、寛永通宝銭やカワラケ（土器皿）が出土した。カワラケに墨書で輪宝を描き、地鎮に利用した例は他にもあるが、実際の製品を伴うものは類例が無い。大名屋敷で行われた地鎮儀礼を知る貴重な考古資料として、東京都指定有形文化財に指定されている。



今回は設備系の皆さんを紹介します。ベテランのNさんと若いSさんのお二人が、センター内の住環境を安全かつ良好に保つために奮闘しています。



早朝、百葉箱を観察する

朝の7時半、百葉箱の計測機器を観察することからSさんの仕事は始まります。その数値をもとにして、他の職員や来館者が来る前に、各部屋の温度をセットします。そして、多摩センター地区全体に設置されている集中冷暖房システムを使用するため、高さ3mにある蒸気バルブを開けます。この作業はNさんが担当しています。



地域冷暖房システムからのバルブ開閉

当センターの冷暖房は、すべてこのバルブの開閉によって行われます。使用可能な電力量が決められているので、全部屋の冷暖房を一度に使うことは出来ません。ここが設備系の腕の見せ所であるとともに気を遣う部分で、来館者や職員に快適に過ごしてもらうために、各部屋の温度や湿度は1時間おきに計測しています。



屋上の冷却装置を掃除する

朝の7時半、百葉箱の計測機器を観察することからSさんの仕事は始まります。

当センターの冷暖房は、すべてこのバルブの開閉によって行われます。

特に夏場の冷暖房管理は、施設の老朽化も手伝って、なかなか難しいように

す。屋上に設置されている冷却装置の、炎天下での清掃作業も欠かせません。蛇足ですが、私は今回初めてセンターの屋上に上り、この装置を確認しました。

設備系の一番大きな仕事は、以上のように空調に関連したものです



展示ホール内の照明を取り替える

が、建物内の各施設に関するメンテナンス作業も重要な仕事の一つです。メンテナンス対象としてはまず、照明器具が挙げられます。特に展示ケース内の照明に関しては、細心の注意が必要とすることでした。それから、トイレの水漏れや排水施設の不具合などの早期発見も重要な仕事の一つです。専門業者が来るまでの間、応急の手当もしなければなりませんし、当然、その知識も必要となります。

お二人は温度や湿度、あるいは電気の使用量などの計測数値やメンテナンスの様子を、日報と言う形で毎日記録しなくてはなりません。「電気日報」「設備運転日報」「建築土木全般定期点検」などです。最後の「建築土木全般定期点検」には館内のみならず庭園や施設の周囲にも目を配った検査内容が記載されています。

当センターの建物は、竣工以来、すでに30年の歳月が過ぎようとしています。



各計測機器の数値を記録する

当然、施設の老朽化は避けられない問題ですが、そのような状況のなかであって、設備係の人たちは、職員や来館者が施設内で安全で快適に過ごせるよう、日々目を光らせています。(福田敏一)

今回取り上げる遺跡は多摩ニュータウンNo. 869 遺跡です。遺跡は稲城市若葉台二丁目、現在の京王線若葉台駅の北側に張り出した低い暖斜面にありました。すぐ傍には三沢川の水源地があります。駅から徒歩5分のまさに駅前遺跡です。昭和62年4月から約1,000㎡の面積を2ヵ月間発掘しました。出土した遺構、遺物は縄文時代の土坑・集石・土器・石器、奈良時代の住居跡・須恵器などでした。

遺跡のすぐ北側丘陵尾根上には約5,000年前の多摩ニュータウン遺跡群のビーナスといえる立派な縄文時代の土偶が出土し、48軒もの住居跡と広い土器捨て場が発見された著名な多摩ニュータウンNo. 471 遺跡がありました。No. 869 遺跡はNo. 471 遺跡から45mも低い位置にあります。この周辺の縄文時代後期の集落はあまり尾根上には残されず、本遺跡と同じような丘陵部でも標高の低い平坦な台地上の地形に残されています。



多摩ニュータウン遺跡の遺跡

発掘に着手した時は、当然のように多摩ニュータウンNo. 471 遺跡に関連するような縄文時代中期の集落や土器捨て場の一部が出土することを期待しました。ところが壺塚らんや、本遺跡では縄文時代中期の遺構、遺物はなく、土器片すら出土しなかったのです。それに代わるように、No. 471 遺跡には出土していない縄文時代草創期、早期の土器、石器と縄文時代後期の土器が数多く出土しました。特に縄文時代後期の完形に復元できる堀之内式土器が出土したことは、当時の多摩ニュータウン遺跡群のなかでも珍しいことでした。多摩ニュータウン遺跡群では縄文時代後期の遺跡そのものが数少なく、そう

した遺跡のある地域も多摩ニュータウン西南端の町田市側の丘陵、稲城市のある多摩ニュータウン地域東端の地域に限られています。稲城市では多摩ニュータウン外となってしまうますが、本遺跡の南東

1.5 kmに縄文時代後期の大きな集落が発見された平尾遺跡、平尾台遺跡があり、堀之内式土器を始めとして、加曾利B式土器、称名寺式土器など縄文時代後期を代表とする土器を多数出土しています。本遺跡で出土した堀之内式土器の一つは、復元すると器高が50cmの大型の深鉢で、これは平尾遺跡で出土している大型の土器に匹敵するものです。

# 1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

# 25 多摩ニュータウンNo. 869 遺跡



写真1 遺跡遠景写真

本遺跡では住居跡は発見されず、縄文時代後期の土器片が出土した周辺では石を焼いた集石が多数発見されました。このような深鉢が持ち込まれていることから煮炊きのような作業でもしていたのでしょうか。本遺跡は三沢川の水源地でもあり、水にも恵まれている環境にあります。平尾遺跡のような大きな集落からこの急峻な丘陵地域に赴いて、狩や採集で得られた食物加工などの作業を行った遺跡の一つであったのかもしれませんが。 (比田井民子)



写真2 復元された縄文時代後期の土器

## 平成27年度 催事のご案内

催事名	対象/人数	日 時		備考
東京都埋蔵文化財センター主催 文化財講演会	先着120名	第1回6/27(土) 第2回9/12(土) 第3回11/14(土)	午後 13:30~15:30	当日受付
東京都埋蔵文化財センター・ 多摩市教育委員会主催 文化財講演会	先着120名	第1回2/4(木) 第2回2/11(祝) 第3回2/18(木)	午後 13:30~15:30	当日受付
遺跡発掘調査発表会	先着120名	3/20(祝)	午後 13:30~15:30	当日受付
展示説明会	参加自由	3/19(土)	午前の部 10:00~ 午後の部 13:30~	当日受付 1時間程度
映像上映会	先着120名	1/16(土)	午後 13:30~15:30	当日受付
自然観察会	一般20名	①4/11(土) ②10/10(土)	午前 10:00~11:30	往復はがきで申込み ①3/30 ②9/28 必着
縄文土器作り教室	①④一般30名 ②③親子15組 (小学4年生以上)	製作 ①5/16・17(土・日) ②7/18(土) ③7/19(日) ④9/5・6(土・日) 野焼き ①6/6(土) ②③共8/1(土) ④9/26(土)	制作 午前 9:30~午後 16:00 野焼き 午前 9:30~午後 13:30	往復はがきで申込み ①5/7 ②③7/6 ④8/24 必着
土偶作り教室	①親子15組 (小学4年生以上) ②一般30名	①8/14(金) ②11/21(土)	①午前 9:30~11:30 ②午前 9:30~午後 15:30	往復はがきで申込み ①8/3 ②11/9 必着
縄文アクセサリー作り教室	①②一般30名 ③ 親子15組 (小学4年生以上)	①4/11(土) ②7/25(土) ③8/21(金)	①午後 13:30~15:30 ②・③午前 9:30~11:30	往復はがきで申込み ①3/30 ②7/13 ③8/10 必着
勾玉作り教室	①③一般30名 ② 親子15組 (小学4年生以上)	①7/4(土) ②8/13(木) ③10/10(土)	①・②午前 9:30~11:30 ③午後 13:30~15:30	往復はがきで申込み ①6/22 ②8/3 ③9/28 必着
古代の糸作り教室	一般30名	6/20(土)	午前 9:30~午後 15:30	往復はがきで申込み 6/8 必着
古代の布作り教室	①一般30名 ②親子15組 (小学4年生以上)	①4/25(土) ②8/14(金)	午後 13:30~15:30	往復はがきで申込み ①4/13 ②8/3 必着
火おこし道具作り教室	親子15組 (小学4年生以上)	①8/13(木) ②8/21(金)	午後 13:30~15:30	往復はがきで申込み ①8/3 ②8/10 必着
トンボ玉作り教室	各時間帯 一般6名	①5/30(土) ②7/11(土) ③9/19(土) ④11/7(土) ⑤1/9(土) ⑥3/5(土)	午前 9:30~11:00 午前 11:00~午後 12:30 午後 13:30~15:00 午後 15:00~16:30 の希望する時間帯	往復はがきで申込み ①5/18 ②6/29 ③9/7 ④10/26 ⑤12/28 ⑥2/22 必着
縄文の貝輪作り教室	一般15名	10/3(土)	午後 13:30~15:30	往復はがきで申込み 9/24 必着
縄文食体験	一般10名 親子10組	①10/24(土) ②10/25(日)	午前 9:30~午後 13:00	往復はがきで申込み ①②10/13 必着
古代カマド作りと食体験	一般20名	11/29(日)	午前 9:30~午後 15:00	往復はがきで申込み 11/16 必着
考古学実習-土器の拓本・断面図の作成-	一般10名	12/5(土)	午前 9:30~午後 15:00	往復はがきで申込み 11/24 必着
縄文ワクワク体験まつり	参加自由 (勾玉作りは予約制)	5/3(祝)・4(祝)	午前 10:00~午後 16:00	当日受付
遺跡庭園であつたろう!	参加自由	12/13(日)	午前 10:00~午後 15:00	当日受付
考古学相談室	参加自由	通年(土日は除く)	午前 10:00~午後 16:00	受付随時

●往復はがきでのお申込みは、催事名・住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、  
〒206-0033 多摩市落合1-14-2 東京都埋蔵文化財センター「〇〇〇(催事名)係宛 まで。  
なお、応募者多数の場合は、抽選になります。

●「一般」は中学生以上、「親子」は小学4年生以上の親子。一般対象の催事は、お一人につき1通の往復はがきが必要です。

●ご記入いただいた個人情報、は、該当事業実施のための案内のみに利用します。利用目的にご同意の上、お申込みください。

お問い合わせ先(平日のみ): 東京都埋蔵文化財センター 経営管理課 広報企画係

電話 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>



たまのよこやま 100

2015年3月31日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>